



〔彫刻家〕加藤 豊さん

1948年生まれ。72年第4回日展入選(以降76年まで連続入選)。神話的な女性像や愛くるしい子どもの彫刻作品を作ること知られる。日本を代表する彫刻家の一人。

〔漆芸家〕増村 紀一郎さん

1941年生まれ。東京藝術大学大学院修了。同大学名誉教授。紫綬褒章受章。重要無形文化財保持者(人間国宝)。2010年よりかすかべ親善大使。第9回春日部市美術展覧会審査員長。

〔フレスコ画家〕金森 良泰さん

1946年生まれ。東京藝術大学大学院壁画科修了。千葉大学教育学部教授を経て、現在は、創作活動を続ける傍ら、春日部市教育委員会委員を務める。紺綬褒章受章。第9回春日部市美術展覧会審査員長。

春日部の魅力をより 高めるのは景観デザイン

——春日部のまちの印象を教えてください。

増村 藝大に勤めていたとき、大学のある東京から春日部に戻ってきて、駅のプラットフォームで深呼吸すると空気のおいしさがわかりました。「あー、春日部に住んでいてよかったです」と思ったものです。東口には彫刻が並んでいて文化的にもいい。

加藤 確かに春日部駅東口は宿場町の面影もあっていいし、駅周辺のモダンさと、少し離れた田園の風景のバランスもとてもいいですね。

金森 市では、小中学生を対象に、「未来の春日部」をテーマにした絵画コンクールを開催しているのですが、応募者の2〜3割は春日部駅をモチーフに出品してくる。駅周辺への関心が高いんですね。

加藤 都心部からのアクセスもよくなっていますよね。今後人の流れがずいぶん変わってくるのでしようね。



増村 かなり便利になるでしょう。ただ、春日部の魅力をもっと上げるのは景観デザイン、つまりアートだと思います。

金森 今も春日部には「首都圏外郭放水路」通称「地下神殿」という、アートとっていい素晴らしい場がある。

増村 あれはいいですね。世界に誇れる。街中でいえば、現状、春日部駅東口の景観は良いので、西口をもっとおしやれにしたい。

アートで元気で魅力的なまち、 春日部をつくらしていきたい。

多くの彫刻がまちを彩り、市展を開けば多くの作品が寄せられる春日部。その一方で、「アートはちょっと敷居が高い」と感じている方もいるでしょう。そこで、春日部とゆかりの深いアーティストの皆さんに「春日部とアート」「アートとの接し方」についてお話を伺いました。

加藤 西口にも少しずつ彫刻が増えてきていますよね。

増村 そういう意味では、西口側で着々と建設が進んでいる新市立病院の「ホスピタルアート」の検討がひとつのきっかけとなって、まちが変わるといいですね。



心を豊かにするアートが 暮らしの中にもっとあつていい

——ホスピタルアートは、アートの力で病院環境を癒しの場に整える試みですね。

増村 そうです。ホスピタルアートの先進国、スウェーデンの病院では、建築費の1パーセントをアートに使っているといわれ、アートの効果が期待されています。

——春日部のホスピタルアートの検討はどこまで進んでいるのですか？

増村 まだ始まったばかりで、すでに採用している他の病院への視察など勉強の段階です。

——どんな作品が飾られるのですか。

加藤 今、具体的な検討をしているところです。
増村 固定するのではなく、いろんな方の作品を飾ってもいいかもしれませんね。

金森 病院には今までアートに興味のなかった人もやってくる。そういう人にアートを見てもらって、「あつ、アートっていいな。美術館に行ってみようかな」と感じてもらいたいですね。アートは特別だけど、特別じゃない。心を豊かにするもの。もっと普通に生活の中にあつていいということを知ってもらいたいです。

加藤 若いアーティストたちの発表や育成の場としても活用できますね。

金森 そうそう。春日部市美術展覧会(市展)の入賞作品を借りて、順番に展示するのもいいですよ。

増村 それはあります。市展は、市民の方々が作品を作つて応募します。自分の作品を見てもらうことで、「昨日より今日。今日より明日。明日より来年」と自分自身の向上につながり、生きがいにもなる。

金森 生きがいは長生きにつながりますね。

加藤 20年くらい前、市が主催する教室で教えたことがあります。当時の生徒さんが、市展に出品して驚きました。みなさん、元気に頑張つていらっしゃる。

増村 そうですか。今、市展の出品者の平均年齢は60歳を超えています。市展の入賞作品を市立病院に展示することで、アートに関心を持つ人や、自分で作品を作ろうという人が増えるかもしれない。アートには新たな生きがいを生み出す可能性がありますね。新しい市立病院は、医療とアートの役割の両輪で、市民の健康を守る病院になりそうです。

金森 まちで気軽にアートに触れることができれば、市民の心にとりや潤いが生まれ、まちのイメージも高まります。

増村 そういった芸術活動にたくさん市民に関わってもらいたいですね。その意味では、我々はアートの種をまいているのかもかもしれません。今後でもできる限り力になりたいです。

